第 39 回 放送番組審議会議事録

2026 年 10 月 9 日

株式会社シーエス・ワンテン
株式会社テレビ朝日

1. 開催年月日　2026 年 9 月 10 日　木曜日　午前 10 時 30 分～12 時 00 分

2. 開 催 場 所　株式会社テレビ朝日本社 8 階特別会議室

3. 委員の出席
委員総数　10 名　出席　7 名　書面参加　3 名
出席委員の氏名

委員長	高木 美也子	（東京通信大学人間福祉学部特任教授）
委　員	後藤 洋平	（朝日新聞社東京本社編集局編集委員）
委　員	笹田 佳宏	（日本大学法学部新聞学科教授）
委　員	竹内 章子	（弁護士）
委　員	平島 綾子	（日経エンタテインメント！編集委員）
委　員	前田 純弘	（昭和女子大学現代ビジネス研究所特別研究員）
委　員	元村 直樹	（明治大学法学部兼任講師）

＜書面参加＞

委　員	戸張 捷	（株式会社ランダムアソシエイツ代表取締役）
委　員	保田 隆明	（慶應義塾大学総合政策学部教授）
委　員	四本 裕子	（東京大学大学院総合文化研究科教授）

放送事業者側出席者氏名

株式会社シーエス・ワンテン	
代表取締役社長	船越 昇
業務推進本部長	中口 裕丈
株式会社テレビ朝日	
コンテンツ編成局総合編成部長	河野 太一
コンテンツ編成局総合編成部サテライトメディア担当部長	谷　俊之
コンテンツ編成局総合編成部	鈴木 祐啓
スポーツ局スポーツ１部	五色 智哉
ビジネスプロデュース局ＣＳ事業部ＣＳ編成担当部長	川北 桃子
ビジネスプロデュース局ＣＳ事業部ＣＳ戦略担当部長	深津 友裕

4．議　題

「テレ朝チャンネル１」課題番組の審議

『ももクロ chant！』第１回　　“苔”

「テレ朝チャンネル 2」課題番組の審議

フィギペディア特別編 りくりゅうペア引退スペシャル

5．審議内容

◆テレ朝チャンネル１

『ももクロ chant！』第１回　“苔”番組審議◆

＜番組内容＞

『ももクロ chant！』は、ももいろクローバーZ を起用した情報性の強いバラエティ番組です。CS の加入者やアイドルファンに限らず、一般の視聴者が“ながら見”でも入りやすい内容を目指しました。

日本の歴史や最新の開発、現場で進む取り組みを、有識者への取材や現地訪問を通じて詳しく紹介し、「日本にはまだまだ魅力があり、元気なんだ」と応援することがコンセプトです。ももクロはアイドルとしてではなく、初めて内容に触れる視聴者と同じ目線で参加しています。

初回は「苔」がテーマです。日本には世界の苔の多くの種類が存在することから調査を始め、制作側にも驚きのある内容となりました。

番組は隔月で企画しており、第 2 回は「日本のマンガ」を取り上げます。

＜委員意見＞

○ 地味に見える苔を深く掘り下げ、休眠や金の回収など知られざる特性を分かりやすく紹介していた。教養とエンタテインメントが調和し、ファン以外も楽しめる内容だった。

○ ももクロの自然なコメントと軽快なやり取り、塚地氏の進行が明るい雰囲気を生んでいた。いとうせいこう氏の参加もロケに広がりを与え、出演者の組み合わせが効果的だった。

○ 初回の説明が必要だったことは理解できるが、苔の本題に入るまでの導入が長かった。冒頭のやり取りを短くし、「モノノフ」など一般視聴者になじみのない言葉には説明がほしい。

○ 非常に見応えのある番組だった。ももクロのメンバーは理解力が高く、リポートも上手だった。

○ 大学への現地取材や専門家の解説が丁寧で、学術的な内容にも興味を持てた。日本の技術を世界に発信するコンセプトもよく、基礎研究の意義を伝える有意義な番組だった。

＜番組担当者から＞

「chant」は聖歌や合唱に由来する言葉ですが、現在、特に若者にはサッカーの応援歌としてなじみがあるため、今回は「応援（歌）」という意味合いで用いています。テーマに関して、第 2 回ではより対象が広いマンガを、以降も例えばクレーンゲームや、蚕、繭といった色々なテーマを試していこうと思っています。

今後も情報・教養番組として内容を充実させつつ、アイドル番組としての魅力をバランスさせて進めていきたいと思います。

◆テレ朝チャンネル２
フィギペディア特別編 りくりゅうペア引退スペシャル　番組審議◆

＜番組内容＞
スポーツは旬を捉えることが大切です。ミラノオリンピックでショート５位から逆転金メダルを獲得したりくりゅうペアこそ大会のハイライトだと感じ、二人の歩みを掘り下げる番組を企画しました。
印象的なガッツポーズの裏には、怪我やコロナ禍で競技ができないなど、山あり谷ありのスケート人生がありました。その過程を継続して取材できたことはテレビ朝日の強みです。ペア結成から金メダル獲得まで各シーズンの競技を見せながら、豊富な舞台裏の映像を織り交ぜました。二人でかき氷を食べるなど、信頼関係があってこそ撮れた氷上以外の姿も紹介。長年のファンにも、オリンピックで初めて知った方にも、二人の歩みが伝わる構成にしました。
３時間という長い番組ですが、ご本人たちにも喜んでいただけるストーリーに仕上がったと思います。

＜委員意見＞
○ 長年の取材で蓄積した豊富な映像が生かされ、アーカイブの価値を実感した。結成からの歩みをシーズン順に追う構成も分かりやすく、二人を知らない視聴者にも成長が伝わった。
○ 各大会の演技をフルで見せることで、技術やスピード、躍動感の変化を実感できた。解説を入れず氷を削る音や歓声を聞かせる演出も、会場で観戦するような没入感を生んでいた。
○ 五輪の演技映像がない点は、権利上の事情を理解しても残念だった。一方、五輪以外の豊富な映像によって、頂点に至る歩みやペア競技ならではの魅力を十分に味わえた。
○ 約３時間でも長さを感じない充実した内容だったが、前後編に分けてもよかった。周辺関係者や他競技の選手への取材を加えれば、二人の歩みをさらに厚みのある形で描けたと思う。
○ 競技映像とインタビューの配分がよく、二人の温かい人柄やユーモアが自然に伝わった。怪我などの困難を乗り越え、互いを支える関係が深まる過程に、胸が熱くなった。

＜番組担当者から＞
貴重なご意見をありがとうございました。
９月上旬に国内で開催されたチャレンジャーシリーズでは、ペアやアイスダンスを応援する観客で満席となり、カップル競技の浸透に、りくりゅうペアの功績を感じました。
二人を継続して取材できたのは、アスリートファーストの精神で関係を築いてきたからです。不調や怪我の時は取材が望まれないこともありますが、相手の気持ちを尊重し、関係を保つことが大切です。その信頼が、怪我やコロナ禍、カナダで二人だけで練習する姿の取材につながり、視聴者の共感を呼ぶ企画になったと改めて感じました。
他の選手も同様に取材を重ねています。ブレイク後だけでなく、その前から選手の存在や魅力を伝えることも、中継権を持つ局の使命として、引き続き取り組んでいきたいと思います。

6. 審議機関の答申又は改善意見に対してとった措置とその年月日
今回の審議会に出された意見については、審議会が開かれた 2026 年９月 10 日以降、各番組のプロデューサー、担当者へのフィードバックをはじめ、番組制作会議等で活用し、更なる番組の向上のために適切な措置を講じるよう努めています。

7. 審議機関の答申又は意見の概要を公表した場合におけるその公表の内容、方法、及び年月日

2026 年 10 月以降に、ホームページに審議会概要を掲載するとともに、放送番組としても公表する予定です。

8. その他の参考事項

次回の放送番組審議会は 2027 年 3 月に開催予定。

以上